

早稲田大学大学院教育学研究科紀要 第二十五号 二〇一五年三月

『大東世語』「寵禮」篇注釈稿

堀 誠・馮 超鴻・高橋 憲子・呂 天雯
趙 倩倩・任 清梅・石本 波留子

〔凡例〕

一、本稿は、服部南郭『大東世語』「寵禮」篇の本文と原注に関する注釈である。

一、注釈は、早稲田大学大学院教育学研究科二〇一三年度科目「国文学演習」（堀 誠担当）の受講生（馮超鴻・高橋憲子・呂天雯・趙倩倩・任清梅・石本波留子）が講読担当話の発表資料に基づいて原稿化した。

一、底本は、早稲田大学図書館蔵本『大東世語』（寛延三年（一七五〇）刊）に依り、また典拠に関しては同館蔵本『大東世語考』（方寸菴漆鍋稿、寛延四年（一七五二）序）を参考にした。

一、「寵禮」篇の都合十四話を、「寵禮」のように順次表記した。

一、注釈は本文の「書き下し文」・「訳文」、原注の「書き下し文」・「訳文」、および「語釈」、「典拠」から構成される。

『大東世語』「寵禮」篇注釈稿（堀・馮・高橋・呂・趙・任・石本）

一、「書き下し文」は、原則として底本の訓点を尊重しつつ、適宜これを改めた。

〔寵禮1〕

藤公良房①。上表辭^二相國^一。先^レ是賜^二安車入朝^一。固辭不^レ受。文德帝特賜^二寶劍一雙^一曰。公宜^下帶^二此劍^一。副^中朕懇情^上。莫^レ使^三蕭何獨誇^二漢代^一②。

〔書き下し文〕

藤公良房、上表して相國^{しゃんこく}を辭す。是より先に安車入朝を賜ふ。固辭して受けず。文德帝特に寶劍一雙を賜ひて曰く、「公宜しく此の劍を帶して、朕が懇情に副すべし。蕭何^{しょうか}をして獨り漢代に誇らしむること莫かれ」と。

〔訳文〕

藤原良房は上表して宰相の職から退いた。これより先に安車での参内

の恩遇をいただいたが、固く辞退して受けなかった。文徳帝は特別に一对の宝剣を与え、仰せになるには、「藤公よ、この剣を身につけて、朕のまごころに従ってくれ。漢代の名相蕭何のみを誇らしめることはない」と。

〔原注〕

①閑院冬嗣之子。攝政大政大臣。文徳后父。清和帝外祖父。

②良房謝表曰。今屬「老疴」。何狎「恆典」。當「陳」執退。速「褫」朝章^上。長歌「竭來」。遽歸「里第」。是則微臣之自分也。但以流波出浦。獨成「嗚咽」。去鳥辭巢。非無「顧慕」。況臣身甚「渭陽之戚」。情異「義合之臣」。必須「粉答」□「恩生死致」命。

〔書き下し文〕

①閑院冬嗣の子なり。攝政大政大臣にして、文徳后の父なり。清和帝の外祖父なり。

②良房謝表して曰く、「今老疴に屬り、何ぞ恆典に狎れんや。當に執退を陳べ、速やかに朝章を褫ぐべし。長く竭來を歌ひ、遽やかに里第に歸る。是れ則ち微臣の自らの分なり。但だ以らく流るる波 浦を出で、獨り嗚咽を成す。去る鳥 巢を辭し、顧慕する無きに非ず。況んや臣の身は渭陽の戚を甚くし、情は義合の臣に異なる。必ずや須らく粉骨して恩に答へ生死 命を致すべし」と。

〔訳文〕

①閑院冬嗣の子である。攝政大政大臣であり、文徳帝の後、染殿后明子の父。清和帝の外祖父である。

②良房は天皇の恩遇に謝して申し上げた。「今老いて病がちになり、どうして通常の典例通りに行えましようや。まさに職務を退く強い思いを述べ、速やかに衣冠を脱ぎましよう。いざ郷里に帰らんの歌を長く口ずさみながら、速やかに郷里の屋敷に帰ります。これこそ賤しい臣下たる私の本分なのです。ただ思うには、流るる波が浦を出て行く時、一人むせび泣き、旅立つ鳥が巢を離れる時、ねぐらを顧み慕うことが思われます。まして私は臣下ではありませんが、文徳帝の伯父という姻戚関係にあり、その思いは単に義によつて結びついている臣下とは異っています。必ずや力の限りご恩に報いるよう生死をかけてお伝え申し上げます」と。

〔語釈〕

上表 表をたてまつる。

良房 藤原良房。八〇四―八七二。平安前期の公卿。人臣最初の摂政。通称染殿・白河殿。承和の変（八四二）で、順子の生んだ皇子文徳天皇を即位させ、ついで娘明子をその妃とし、天安元年（八五七）人臣で初の太政大臣となつて実質的な摂政となつた。応天門の変（八六六）の政界混乱に乗じて摂政の詔を得て、正式にも摂政となつた。死後、美濃公に封ぜられ、忠仁公の諡号を賜わる。

冬嗣

藤原冬嗣。七七五―八二六。平安初期の公卿。嵯峨天皇の信任あつく、藏人頭、陸奥出羽按察使、中納言、右大臣、左大臣と進み、娘順子を仁明天皇の妃にするなど皇室と血縁を深め、

家運の隆盛を図った。「弘仁格式」「内裏式」「日本後紀」などの選定事業を行ない、一族子弟のために「勸学院」を設けた。

文德后 文德天皇の皇后。染殿后明子^{あまざけいこ}。惟仁親王（のちの清和天皇）の母。

清和帝 清和天皇。八五〇～八八〇。第五十六代天皇。文德天皇の第四皇子。天安二年（八五八）八歳で即位。在位中に「貞観格式」を編集させた。元慶三年（八七九）出家。法諱は素真。

文德帝 文德天皇。八二七～八五八。第五十五代天皇。名は道康。仁明天皇の第一皇子。母は藤原冬嗣の女順子。承和九年（八四二）立太子。嘉祥三年（八五〇）即位した。在位中の政はもっぱら藤原良房によって行なわれ、在位九年にして三十二歳で崩御した。御陵は京都市の田邑山陵。

相國 宰相の称。もと丞相の上に位したが、後、丞相をも相国と称して、遂に宰相の通称となる。

安車 坐乗する車。一頭の馬に駕する蓋の低い小車で、老人や婦女の使用に供する。安輿。

公宜帶此劍。副朕懇情 この記述は『漢書』卷三十九「蕭何曹參傳第九」の以下の部分に関わるか。「上曰、「善。」於^レ是乃令^二何第一^一、賜^レ帶^レ劍履上^レ殿、入^レ朝不^レ趨^一。

蕭何 漢の開國の功臣。沛県（江蘇省）出身。諡は文終。紀元前二〇六年、秦が滅亡し、劉邦が漢王に封建されると、蕭何は丞相に任命され、内政の一切を担当する。漢朝建立後、「与民休

息」の政策を行い、律令制度を制定し、「九章律」（法典）を定めた。

閑院 藤原冬嗣の邸宅。二条大路南・西洞院西の方一町の地。平安末から鎌倉中期には各天皇の里内裏。一二五九年焼失。

謝表 恩遇に対して、上書して自ら敢て当たらないことを陳べる。こと。また、其の上書。謝章。

疴 やまい。

恆典 つねのり。

狎 なれる。事に手なれる。親しみなれる。

朝章 国家の憲章。朝廷の綱紀。朝服。官人の衣冠。「章」は、しるし。印や模様。

長歌 声を長くひきのばして歌う。

竭來 発語の辞。聿^{いづち}来^ちに同じ。一説に、去る、去来、往来。『文德實錄』卷第八、天安元年正月乙丑（廿六日）条の頭注に、「竭來は、文選思玄賦注に、衡曰、竭去也、善曰、劉向七言曰、竭來婦耕永自疎とあり、婦去来と云に同じ」とある。『文選』卷第十五張衡「思玄賦」の原文は「廻^レ志竭來從^二玄謀^一、獲^二我所^レ求夫何思^一」。

流波出浦。獨成鳴咽。去鳥辭巢。非無顧慕。 この表現は『文苑英華』卷第六百一表四十九の蘇頌「初至益州上訖陳情表」の「流波出^レ浦而鳴咽、玄燕辭^レ巢而顧慕、況若^レ臣者、最蒙^二聖渥^一」に依拠するか。

渭陽之戚「渭陽」とは『詩経』『秦風』の篇名。秦の康公がその母の兄弟である晋の文公の帰国を渭陽に見送り亡き母を追念し、後日作った詩。この詩に基づいて、母方の伯叔父（舅）、また母方の祖父などをも「渭陽」という。藤原良房は文徳帝にとって母方の伯父にあたり、また、その子（清和帝）にとっては外祖父にあたる。

義合之臣 義によって結びついている臣下。『礼記』曲礼篇に「君臣

義合、父子天合」とある。

致命 身命を捨てる。

〔典故〕

『文徳実録』巻第九、天安元年三月辛丑（四日）条。

〔備考〕

原注②は『文徳実録』巻第八、天安元年正月乙丑（廿六日）条に依る。

（高橋 憲子）

〔寵禮2〕

延喜御宴。詩題「禁中翫月」。讀師以次唱「群臣詩」。至於三統理平作。天山不辨何年雪。合浦應迷舊日珠。已畢。乃將唱他詩。上命暫住。且令三復理平一聯。理平叩味。不覺感泣云。聖主哉。人皆晒之。

〔書き下し文〕

延喜の御宴に、詩「禁中に月を翫ぶ」といふを題とす。讀師 次を

以て群臣の詩を唱ふ。三統理平が作、「天山辨ぜず何れの年の雪ぞ、合浦應に迷ふべし舊日の珠」といふに至る。已に畢りて、乃ち將に他の詩を唱へんとす。上命じて暫く住め、且つ理平が一聯を三復せしむ。理平叩味す。覚えず感泣して云く、「聖主なるかな聖主なるかな」と。人皆 之を晒ふ。

〔訳文〕

延喜の帝（醍醐天皇）が開催した御宴で、「御所で月を賞玩する」という題で詩を作ることがあった。読師は順番に臣下たちが作った詩を朗詠した。三統理平の作、「天山不辨何年雪。合浦應迷舊日珠（皓々と照らす月の光は、天山にいつ降った雪とも分ならず、合浦に帰ってきた昔の真珠かと思われる）」の番になった。読師は詩を詠み終わって他の詩を朗詠しようとしたが、帝はしばらく止めるように命じ、そのうえ、理平の一聯の詩句を何度も復唱させた。この恩遇を受けて、理平は膝を叩いた。思わずうれし泣きをして、「聖主なるかな！聖主なるかな！」と言った。これを見た人々は、皆笑った。

〔語釈〕

延喜 第六十代醍醐天皇の年号。九一〇～九二二。

禁中翫月 禁中は、天子の御所の中。翫月は、月をもてあそぶ。月を

賞する。詩の題目である。典故となる『江談抄』第四―十四話には、「禁庭翫月」に作る。

讀師 和歌または作文の会の時、懷紙、短冊を整理して、また番の次

第に順い、取って講師に渡す役。

三統理平 八五三〜九二六。平安時代前期から中期にかけての官吏、漢詩人。大蔵善行に学ぶ。文章博士を経て式部大輔、従四位下。

『日本三代実録』、『延喜格』、『延喜式』の編修にくわわった。詩は『雑言奉和』などにみえる。

天山 キルギス共和国から中国の新疆ウイグル自治区にかけて東西に連なる山脈。

合浦 今の広東省海康県の西のあたり。もと珠を産したが、貪汚の宰守が多かったため、暫く産しなくなったが、後漢の孟嘗が太守となるに及び、清廉を以て政事に臨んだので、再び産したという故事がある。

感泣 深く心に感じ泣く。また、喜び極つて泣く。うれし泣きをする。叩味 膝を叩く意。典故となる『江談抄』には、「叩味」を「叩膝」に作る。「味」を「膝」に変えて、解釈しておく。

晒 わらう。

〔典故〕

『江談抄』第四―十四話。

(馮 超鴻)

〔寵禮3〕

天曆帝謂「源延光」曰。相得如「是」。朕百歳後。卿儻有「憶邪」。延光曰。天恩無「極」。不「可」暫忘「」。帝曰。時或應「思爾」。常豈不「忘哉」。延光曰。千秋萬歳後。臣願終身不「釋」喪。以爲「刻心之符」。晏駕後。遂服終「

身。後帝時。或不「得」已。則素服從「事。後帝亦每「見垂」涙。

〔書き下し文〕

天曆帝 源延光に謂ひて曰く、「相得ることはくの如し。朕 百歳の後、卿儻しくは憶ふこと有らんや」と。延光曰く、「天恩極まる無し。暫くも忘るべからず」と。帝曰く、「時に或いは應に思ふべきのみ、常に豈に忘れざらんや」と。延光曰く、「千秋萬歳の後、臣願はくは終身 喪を釋かずして、以て刻心の符と爲さん」と。晏駕の後、遂に服して身を終ふ。後帝の時、或いは已むことを得ざれば、則ち素服して事に従ふ。後帝も亦た見る毎に涙を垂る。

〔訳文〕

天曆帝(村上天皇)は源延光に、「あなたとはかくまでも意気投合して、私が死んだ後、あなたは自分のことを思い出してくださるのだろうか」と言った。源延光は「天子の極まることなき恩恵を頂戴しており、しばしとて忘れることはありません」と言った。天皇は、「時々思い出すに過ぎないだろう。いつも忘れないことがあるのか」と言った。源延光は「お隠れになった後、臣は生涯喪服を脱がず、それを心に刻みつけたしるしとしたいと願っています」と言った。崩御なさった後、とうとう喪服を着たまま生涯を終わった。次の冷泉天皇の時に、やむを得ない場合にも、喪服を着たまま仕事に従事した。天皇もまた見るたびに涙を流した。

〔語釈〕

天曆帝 九二六〜九六七。天曆(九四七〜九五七)の天皇、即ち村上

天皇。母は藤原穩子。名は成明。天慶三年（九四〇）元服し三品。同九年即位。天曆三年（九四九）藤原忠平の没後は関白を置かず親政。そのため後世「聖代」視され、醍醐天皇治世とともに「延喜天曆の治」と称される。文化的には和歌所の設置、『後撰和歌集』の撰進、天徳四年（九六〇）の歌合を始め多くの歌合が行われ、最後の官撰儀式書『新儀式』の編纂が行われた。

源延光 九二七～九七六。醍醐天皇の第三皇子代明親王の子。母は右大臣藤原定方の女。天慶九年（九四六）從四位下に叙され、改賜姓。諸官を経て康保三年（九六六）参議となる。安和三年（九七〇）権中納言、天祿三年（九七二）中納言、極位は從三位。村上天皇の信任あつて名臣として知られる。故実を藤原実頼に教えた。和歌にすぐれ、多くの歌合に参加。

相得 気が合う。

百歳後 百年の後。転じて、人の死後をいう。『詩経』「唐風・葛生」に「百歳之後師于其居」とあり、人の寿命はおよそ百歳をすぎることはないからいう。

天恩 造化の恩。上帝の恵。また、天子の恩恵。君恩。

千秋萬歳 千年万年。非常に長い年月。いつまでも。

終身 命を終えるまでの間。生涯。一生。終生。

刻心 心にきざみつけて忘れぬこと。

晏駕 天子の崩御を忌んでいう語。晏は晩の意。日が暮れてから靈柩

が出発することから。

素服 染めていない白地の衣服。喪服。

〔典拠〕

『今鏡』卷九「むかしがたり（あしたづ）」。

『古今著聞集』卷四第一三四話「枇杷大納言延光の夢に村上天皇御製を賜ふ事」。

『本朝一人一首』卷九―四四七「村上帝を夢む」。

（カパツ・ダニーロ）

〔寵禮4〕

藤雅材。貧獨未_レ見_レ知。俄召爲_レ郎。時宿_二或人婢舍_一。齎_レ詔使。索至_二其家_一。正當主人亦希_二郎選_一。謂到_レ己。大喜經營。使云。不_レ關_二主人事_一。命下_二秀才君_一也。主人怪搜_二其姉妹之婢舍_一。有_二一客_一出。皆見_二其悴陋_一不_レ信。使云。即其人也。遂傳_レ詔去。主家乃愧。遷_レ怒逐_二其婢_一。上聞_二其事_一。閱_二其落魄_一。詔賜_二内府諸物_一。令_二具裝而朝_一。

〔書き下し文〕

藤雅材、貧獨にして未だ知られず。俄かに召されて郎と爲る。時に或る人の婢舍に宿す。詔を齎する使ひ、索めて其の家に至る。正當に主人も亦た郎選を希ふ。謂へらく己に到ると。大いに喜びて經營す。使ひ云く、「主人の事に關らず。命は秀才の君に下るなり」と。主人怪しみて其の姉妹の婢舍を搜る。一客有りて出でたり。皆 其の

悴陋^{すいろう}を見て信ぜず。使ひ云く、「即ち其の人なり」と。遂に詔を傳へて去る。主家乃ち愧^はぢて、怒りを遷して其の婢を逐ふ。上其の事を聞き、其の落魄^{らくはく}を聞^{あは}れみ、詔して内府の諸物を賜ひ、具装して朝せしむ。

〔訳文〕

藤原雅材は貧しく孤独で未だ世に知られていなかった。突然帝に召し出されて郎（蔵人）に任命された。その時、雅材はある人の下女の住まいに身を寄せていた。帝からの詔を届けにきた使者は、探し求めてその家に辿り着いた。折しも、この家の主人も郎に任命されることを願っていた。主人は自分の任官の辞令が出たものと思い、大変喜んで使者を接待した。使者は「この度の任官はあなたとは関係ありません。任命は秀才の君に下ったものです」と言った。主人は不審に思つて、妻の姉妹の下女のすまいを探ると、一人の客が出てきた。そのやつれてみすばらしい身なりを見て信じられなかったが、使者は「この方にも他なりません」と言つて、そのまま詔を伝えて立ち去つた。主人は恥じいり、怒りを下女に向けて逐いだした。帝はそのことを聞くと雅材の落魄ぶりを憐れんで、詔を下して宮中の諸物を下さつて、その装束を身につけて参内させた。

〔語釈〕

藤雅材 生没年不詳。平安中期の文人。父は藤原経臣。天徳元年（九五七）得業生。同三年（九五九）の内裏詩合には行事官として参加。翌四年（九六〇）二月の釈奠には序者を務め、この詩序の秀句によつて蔵人に拔擢されたという。応和二年

（九六二）対策に及第し、式部少丞となる。安和二年（九六九）、従五位上右少弁に至る。『扶桑集』に載る詩人でもあり、『本朝文粹』、『粟田左府尚齒会詩』、『類聚句題抄』に五首の詩文が残る。

郎 中国の官名。侍郎、員外郎、尚書郎などの総称。ここでは、雅材の官名を指す。

婢 召し使いの女。下女。

齋 持つてくる。

希郎選 郎に選ばれることを願う。

經營 物事の準備や人の接待などにつとめ励むこと。

秀才 大学寮の文章得業生の唐名。

悴陋 やつれてみすばらしい。

閔 憐れむ。

落魄 落ちぶれること。

内府 王室の蔵。表蔵。

〔典拠〕『今鏡』巻九「むかしがたり（あしたづ）」。

〔備考〕『十訓抄』十ノ二十八「九臯に鳴く鶴」に村上天皇が雅材の学識を称賛して彼に装束を与える記述がある。「九臯に鳴く鶴」に続いて、二十九「橘直幹の申文」がある。

『大東世語』寵禮篇では、その配列順も藤原雅材、橘直幹の順番となつてゐることから、南郭は『十訓抄』を参照したことが推察される。雅材が蔵人に昇進したきっかけとなつた秀句も『十訓抄』に見られる。

ただし、『十訓抄』と比べると、寵禮篇第四話の雅材に関する記述は『今鏡』がより近いように思われる。

（任 清梅）

〔寵禮5〕

橘直幹爲「文章博士」。先例文章博士。皆兼「他官」。直幹申「請兼官」。曰。拜除之恩惟一。榮枯之分不同。依人而異事。雖似「偏頗」。代「天而授官。誠懸「運命」。帝初覽不悦。至「後云」簞瓢屢空。草滋「顏淵之巷」。藜藿深鑣。雨濕「原憲之樞」。帝歎曰。一世文士也。窮乃至「此」。亦朕過矣。即拜「民部大輔」。

〔書き下し文〕

橘直幹 文章博士と爲る。先例には文章博士、皆他官を兼ね。直幹 兼官を申請して曰く、「拜除の恩 惟れ一にして、榮枯の分同じからず。人に依りて事を異にす、偏頗に似ると雖も、天に代りて官を授く、誠に運命に懸る」と。帝初め覽るに悦ばず。後に「簞瓢屢しば空し。草 顏淵の巷に滋し。藜藿深く鑣す、雨 原憲の樞を濕す」と云ふに至りて、帝歎じて曰く、「一世の文士なり。窮すれば乃ち此に至る。亦た朕が過ちなり」と。即ち民部大輔に拜す。

〔訳文〕

橘直幹は文章博士になった。先例では、文章博士となる者は皆、他官を兼務していた。直幹も兼官を申請して言うには、「任官される恩は同じであるが、盛衰の運命は同じではない。人によって処遇が異なる

ことは、片寄りがあると言えますが、帝は天に代わって官をお授けになるのであり、誠に運命に懸かるものです」と。帝は上申書を御覧になった当座は、よい心地がしなかった。しかし、後半にいたって、「わりこやひさごはしばしば空になり、草は顏淵の陋巷に生い茂っている。藜藿で深くとぎされ、雨は原憲の戸口を濡らしていた」という字句に読みいたると、（帝は）「一代の文士である。窮するのあまり、兼官を申し出るにいたったのだろうか。これもまた私のあやまちであった」と。すぐさま帝は民部大輔に任命なさった。

〔語釈〕

橘直幹〔賢媛10〕〔語釈〕「橘直幹」参照。生没年未詳。平安中期の学者・官人。天曆三年（九四九）文章博士に任ぜられる。

拜除 官を拜命する。前官を除いて新官を拜命すること。

榮枯 草木がしげり枯れること、転じて、榮えることと衰えること。

偏頗 考え方や立場などが一方にかたよっていて公平ではないこと、

蟲屑。

帝 村上天皇のこと。九二六〜九六七。在位九四六〜九六七。第

六十二代天皇。

簞瓢

簞食瓢飲の略。「簞」は、竹や草であんだ丸い飯びつ。「瓢」は、ひさごで、飲み物をいれる。転じて、清貧に安んずることをいう。

顏淵

顏回、字は子淵。前五一四〜前四八三。中国、春秋時代の儒学者。孔門十哲の一人。『論語』「雍也」篇に、「一簞食一瓢飲在

陋巷」と顔回が清貧に安んじながら、学問に邁進したことを伝えている。『蒙求』の標題に「顔回瓢飲」がある。

藜藿「藜」中国原産、アカザ科の一年草。「藿」は、豆の葉。「藜藿」は、粗末な食べ物の意。

簞瓢屨空 草滋顔淵之巷 藜藿深鎖 雨濕原憲之樞 『和漢朗詠集』
『本朝文粹』には「瓢簞屨空、草滋顔淵之巷。藜藿深鎖。雨濕原憲之樞。」とつくる。

原憲 字は子思。生没年未詳。春秋時代の儒学者で、孔子の弟子の一人。清貧につとめていたとされる。『莊子』「讓王」篇に「原憲居魯。環堵之室、茨以生草、蓬戸不完、桑以為樞。而甕牖二室、褐以為塞。上漏下濕、匡坐而弦。子貢乘大馬、中紺而表素、軒車不容巷。往見憲。憲華冠縱履、杖藜而應門。子貢曰、噫先生何病。憲曰、無財謂之貧、学而不能用、謂之病。今憲貧也。非病也。」とある。『蒙求』の標題に「原憲桑樞」がある。

〔典故〕

『十訓抄』第十一二十九話。

〔備考〕

『大東世語考』には典故が明記されていないが、橘直幹の上申書は『本朝文粹』卷六「請被特蒙天恩兼任民部大輔闕状」に収載される。本文中の「簞瓢屨空 草滋顔淵之巷 藜藿深鎖 雨濕原憲之樞」は『和漢朗詠集』『雑』に摘句される。「簞瓢屨空」は陶淵明「五柳先

生伝」にも見える。

(石本 波留子)

〔寵禮6〕

藤爲時①爲淡州。怏怏未之官。即因宮掖奏文。有云。昔學寒夜。紅淚沾襟。除目春朝。蒼天在眼。上覽慙恨。入寢不朝。丞相③朝參候問。女侍云。偶向御覽爲時文辭。乃爾。丞相憂懼。時源國盛既除越前。乃諭旨令辭。而俄授爲時越前。上乃喜起。越前句麗所來到。上蓋欲遣爲時以文關巧爾④。

〔書き下し文〕

藤爲時 淡州と爲り、怏怏として未だ官に之かず。即ち宮掖に因りて文を奏す。云ふこと有り、「昔學の寒夜、紅淚 襟を沾す。除目の春朝、蒼天 眼に在り」と。上覽て慙恨し、寢に入りて朝せず。丞相朝參して候問す。女侍云く、「偶たま向に爲時が文辭を御覽じて乃ち爾り」と。丞相憂懼す。時に源國盛既に越前に除す。乃ち旨を諭して辭せしめて、而して俄かに爲時に越前を授く。上乃ち喜びて起つ。越前は句麗の來り到的る所なり。上蓋し爲時を遣わして文を以て巧を關しめんと欲するのみ。

〔訳文〕

藤原爲時は淡路の国守に任官されたが、満足しないで任地に赴かなかった。そこで、宮中に行つて上奏文を出した。言うことには「昔、苦学した寒い夜、血涙は襟を濡らした。(今) 除目の行われる春の朝、

青く澄み渡る空は目にしみている」と。帝はそれをご覧になって恥じて、御寝所に入って朝儀にはお出でにならなかった。丞相道長は参内して、その原因をうかがいきいた。女官は「先ほど偶然に爲時の上奏を御覧になられてから、こうなったのです」と言った。丞相はとても心配していた。その時、すでに源国盛は越前守に除せられていた。そこで、（国盛に）その趣旨をさとし告げて任官を辞退させ、すぐさま爲時に越前守を与えた。すると、帝は喜んでお出ましになった。越前は高麗人の訪れる所である。帝はおそらく爲時を遣わして文章で（高麗人と）巧拙を競わせようとしたのであろう。

〔原注〕

① 刑部太輔雅正之子。紫式部父。

② 一條帝。

③ 道長。

④ 去^レ國三年孤館月。歸程萬里片帆風。畫鼓雷奔天不^レ雨。綵旗雲聳地生^レ風。爲時在^レ越所作。時以爲「佳句」。

〔書き下し文〕

① 刑部太輔 雅正の子なり。紫式部の父なり。

② 一條帝なり。

③ 道長なり。

④ 「國を去ること三年 孤館の月。歸程 萬里にして片帆の風。

畫鼓 雷奔して天 雨ふらず。綵旗 雲に聳え地 風を生ず」。

爲時 越に在りて作るところなり。時に以て佳句と爲す。

〔訳文〕

① 刑部太輔雅正の子であり、紫式部の父である。

② 一條天皇である。

③ 道長である。

④ 「都を立ち去って三年間は一人で屋敷で月を眺めてきた。今は都に帰ることができ、帰路は万里あるといえども、片帆をふくらませる順風である。絵を画いた太鼓を叩いて、音は雷のように響いているけど、雨が降っていない。絵柄模様の旗は雲に聳え、大地には風を巻き起こしたようである」との詩句は、爲時が越前にいた時作ったものであり、当時佳句とされた。

〔語釈〕

藤雅正 藤原雅正。？～九六一。平安前期の官人。室に右大臣藤原定

方の女がおり、為頼、為長、為時を儲ける。周防守、豊前守、

刑部太輔を務め、極位は従五位下であった。『後撰和歌集』に

紀貫之、伊勢、大輔らとの贈答歌を含む七首を入集。

藤爲時 藤原爲時。生没年不詳。平安時代中期の学者、漢詩人。父は

藤原氏北家良門流、雅正。母は藤原定方の女。紫式部の父。安

和元年（九六八）に播磨権少掾となり、永観・寛和年間（九八三

・八七）式部丞・藏人となったが、花山天皇退位とともに失職

した。寛弘六年（一〇〇九）に左少弁・藏人に復し、その二年

後に越後守として現地に赴いたが、長和三年（一〇一四）六月

に辞職、帰京した。当時から一流の詩人として認められ、東三

条院詮子・藤原道長・同頼通らの邸に招かれ、詩会・歌合に参加、献詠している。『本朝麗藻』『類聚句題抄』『和漢兼作集』などに合わせて二十七首（現存二十五首）、寛仁二年藤原頼通大饗屏風詩』の中にも一首（七絶）がある。和歌を四首を遺している。

紫式部 生没年不詳。平安中期の女流作家、歌人。『源氏物語』の作者。父は藤原為時。母は藤原為信の女。本名は不詳で、「藤式部」

が当時の女房としての呼び名であり、「紫式部」は、死後の呼称と思われる。「紫」は『源氏物語』の女主人公紫上に由来し、「式部」は父の官名「式部丞」に基づく。学者であった父の蔵書を読みあさり、琴にも巧みであった。長徳四年（九九八）、遠縁で父の友人でもあった藤原宣孝と結婚し、娘の賢子を生んだが、長保三年（一〇〇一）四月に宣孝は急死した。その秋ごろから『源氏物語』は書き始められたらしい。その評判が高くなって、寛弘二年（一〇〇五）十二月二十九日一条天皇の中宮彰子の宮中に召し出された。長和二年（一〇一三）秋ごろ、一旦宮仕えを退いたらしいが、寛仁二年（一〇一八）ごろ再び彰子に出仕、翌三年正月五日には取次ぎ女房として姿を見せる。それ以後のことは明らかではない。

淡州 旧国名の一つ。淡路国。現在の兵庫県淡路島。

怏怏 心が満ち足りないさま。晴れ晴れしないさま。

宮掖 帝王の居所。宮中。禁中。

紅涙 血の涙。悲嘆にくれて流す涙をいう。

除目 平安時代以降、大臣以外の諸官職を任命する朝廷の儀式。地方官を任命する春の県召の除目、京官を任命する秋の司召の除目のほか、臨時の除目もあった。

一条帝 九八〇～一〇一一。日本第六十六代天皇。九八六～一〇一一

在位。円融天皇の第一皇子。母は藤原兼家の女の詮子。諱は懷

仁。寛和二年（九八六）六月二十三日、花山天皇の出家の事件によって七歳で踐祚、外祖父の右大臣兼家が摂政となった。正暦元年（九九〇）正月五日、十一歳で元服し、その後兼家の子の道隆・道兼が摂政・関白を勤めたが、長徳元年（九九五）からは、兼家の第四子の道長が内覧の右大臣、ついで左大臣として権を振るい、藤原氏の全盛期に入った。寛弘八年（一〇一一）六月十三日、病により三条天皇に譲位、同月二十二日、一条院に崩御、三十二歳。天皇ははじめ道隆の女定子を皇后とし、翌年、道長の女彰子が中宮に立ち、寛弘五年に敦成親王（後一条天皇）、同六年に敦良親王（後朱雀天皇）が生まれて道長一家の権勢は確立した。天皇は公正温雅で才学に富み、特に笛に巧みで、廷臣の信頼を集めた。

道長 藤原道長。九六六～一〇二七。平安時代中期の公卿。摂政、太

政大臣。御堂関白・法成寺関白などの別称がある（ただし実際には関白になっていない）。父は藤原兼家、母は藤原中正の女時姫。長徳元年（九九五）五月内覧の宣旨を受け、六月には右

大臣、氏長者となり、翌二年七月には左大臣に進んだ。長保元年（九九九）十一月には、その女彰子を一条天皇に入内させ、翌二年二月中宮に冊立し、寛弘五年（一〇〇八）九月の敦成親王（のちの後一条天皇）の誕生により外戚としての地歩を固めた。長和元年（一〇一二）二月には妍子を三条天皇の、寛仁二年（一〇一八）十月には威子を後一条天皇の、それぞれ中宮に立て、「一家立^三后^一、未^二曾有^一」（『小右記』同年十月十六日条）と評された。日記『御堂関白記』がある。

慙恨 恥じて恨むこと。恥ずかしい気持ちにさせられたことに対する恨み。

朝 君主が朝廷にでて政務をとる。

憂懼 好ましくない事態になることを心配し恐れること。

源國盛 生没年不詳。平安中期の官人。光孝源氏。信明男。但馬守、常陸介、讃岐守などを歴任。極位は正四位下。

越前 旧国名。現在の福井県北部にあたる。

句麗 高句麗。古代朝鮮の三国の一。紀元前後にツングース系の扶余族の朱蒙が建国。六六八年、唐・新羅の連合軍に滅ぼされた。片帆 船の帆を一方に傾け、風をはらませること。また、そのような帆のある船。

〔典故〕

『今鏡』卷九「むかしがたり（まことの道）」。

『今昔物語集』卷第二十四「藤原為時作詩任越前守」（第三十話）。

『十訓抄』第十一・三十一話。

『統本朝往生伝』第六十六話。

『古事談』卷第一―第二十六話。

〔備考〕

典故は五つ数えられるが、内容的に『大東世語』に一番近いのは『今鏡』である。為時の佳句は他の四つの作品にはなかった。また、『今昔物語集』では、天皇は為時の申文を見ず、道長が為時の文章に感動したと記している。

（呂 天雯）

〔寵禮7〕

永延朝稱^レ多才。言語之臣。有^二齊信公任俊賢行成^一。世號^二四納言^一。又有^二宮媛十數人^一①。皆一時宮掖令秀。詠言之選。帝每曰。朕之不徳。唯得^レ人一事。庶^二亦不^レ愧^二前朝^一。

〔書き下し文〕

永延の朝 才多しと稱せらる。言語の臣、齊信、公任、俊賢、行成有り。世 四納言と號す。又た宮媛十數人有り①。皆一時の宮掖の令秀、詠言の選なり。帝毎に曰く、「朕の不徳、唯だ人を得るの一事、亦た前朝に愧ぢざるに庶し」と。

〔訳文〕

一条天皇の御代は、秀才が多いことで知られている。詩文（真名文）に優れた臣下として、齊信、公任、俊賢、行成の四人がおり、世に四

納言と呼ばれた。また、十数人の女官がいた。皆その当時の宮中の才媛であり、和歌（仮名文）に優れた歌人であった。帝が常に言うことには、「わたしは不徳の身ながら、有能な人材に恵まれたことは、前朝に劣らないでしょう」と。

〔原注〕

① 前守爲時女紫式部。大隅守時用女赤染衛門。大江雅致女和泉式部。道貞親王女小式部。重明親王女小大君。輔親女伊勢太輔。出羽守秀信女出羽辨。越前守懷尹女小辨。左馬頭時明女馬内侍。高階成忠女高内侍。大江匡衡女江侍従。參議廣業女新宰相。信濃守隆信女兵衛内侍。道雅女中將。

〔書き下し文〕

① 越前守爲時の女紫式部、大隅守時用の女赤染衛門、大江雅致の女和泉式部、道貞親王の女小式部、重明親王の女小大君、輔親の女伊勢太輔、出羽守秀信の女出羽辨、越前守懷尹の女小辨、左馬頭時明の女馬内侍、高階成忠の女高内侍、大江匡衡の女江侍従、參議廣業の女新宰相、信濃守隆信の女兵衛内侍、道雅の女中將なり。

〔訳文〕

① 越前守爲時の娘紫式部、大隅守時用の娘赤染衛門、大江雅致の娘和泉式部、道貞親王の娘小式部、重明親王の娘小大君、輔親の娘伊勢太輔、出羽守秀信の娘出羽弁、越前守懷尹の娘小弁、左馬頭時明の娘馬内侍、高階成忠の娘高内侍、大江匡衡の娘江侍従、參議広業の娘新宰相、信濃守隆信の娘兵衛内侍、道雅の娘中將で

ある。

〔語釈〕

永延朝 平安中期、一条天皇（在位九八六～一〇二一）の時の年号。九八七年～九八九年。転じて、一条天皇の御代を指す。

言語の臣 ここでは、真名文学に優れている臣下の意。

齊信 藤原齊信。九六七～一〇三五。平安時代中期の公卿・漢詩人。

藤原爲光の次男。母は藤原敦敏の女。長保三年（一〇〇一）從三位で權中納言、寛弘六年（一〇〇九）正二位で權大納言、寛仁四年（一〇二〇）大納言に進んだ。詩は『本朝麗藻』などに入っている。政務に堪能で、一条朝の四納言の一人と称され、『江談抄』『古事談』『枕草子』などにも逸話がみえる。

公任 藤原公任。九六六～一〇四一。平安時代中期の公卿・歌人。中

古三十六歌仙の一人。藤原頼忠の長男。母は嚴子女王。長保元年（九九九）從三位、中納言、左衛門督、權大納言などを歴任。一条朝の四納言のひとり。漢詩、管弦にもすぐれ、三船の才をうたわれた。『三十六人撰』『和漢朗詠集』を編集、歌論書『新撰髓脳』、有職書『北山抄』などの著作がある。家集に『公任集』。

俊賢

源俊賢。九六〇～一〇二七。平安時代中期の公卿。醍醐天皇の皇孫。左大臣源高明の三男。母は藤原師輔の三女。長徳元年（九九五）參議、寛弘元年（一〇〇四）權中納言、寛仁元年（一〇一七）權大納言に進む。治部卿、皇太后宮大夫などをか

ねた。正二位。藤原道長の権勢をささえた能吏で、藤原公任らとともに一条朝の四納言と称される。『大鏡』『古事談』に賢者としての逸話がみえる。

行成 藤原行成。九七二―一〇二七。平安中期の公卿・書家。藤原義孝の子。母は源保光の女。権中納言、権大納言などを歴任。一条天皇・藤原道長に信任が厚く、道長の子長家を娘の婿に迎えている。諸種の才芸にすぐれ、『枕草子』『栄花物語』などに多くの逸話が伝えられ、和歌は『後拾遺和歌集』以下の勅撰集に入集し、詩文も数首伝えられている。とりわけ能書家として著名で、小野道風、藤原佐理とともに三蹟の一人。日記『権記』。筆跡は「権蹟」ともよばれ、真跡の書状「白楽天詩巻」「本能寺切」がある。

四納言 平安時代、一条天皇の時代に、秀才として特に知られていた四人の納言。すなわち、権大納言藤原公任・権中納言藤原斉信・権中納言源俊賢・権中納言藤原行成。

宮媛 宮中に仕える女官。こしもと。

越前守爲時 「寵禮6」「語釈」「藤爲時」参照。

紫式部 「寵禮6」「語釈」「紫式部」参照。

大隅守時用 赤染時用。生没年未詳。赤染衛門の父。右衛門志、右衛門尉などを務めた。

赤染衛門 生没年未詳。平安時代中期の歌人。藤原道長の妻倫子に、のちその娘の上東門院に仕える。貞元元年（九七六）ごろ大江

匡衡と結婚。中古三十六歌仙のひとり。『後拾遺和歌集』などに多く歌が見え、和泉式部と並び称される。『栄花物語』の作者といわれる。家集に『赤染衛門集』、紀行文に「尾張紀行」など。

大江雅致 生没年未詳。和泉式部の父。従四位上。越前の守。

和泉式部 平安時代中期の歌人。大江雅致の女。母は平保衡の女。長徳二年（九九六）和泉守橘道貞と結婚。夫と別居後、為尊親王、敦道親王の求愛をうけたがともに死別。のち中宮彰子に仕え、藤原保昌と再婚した。中古三十六歌仙のひとりで、『拾遺和歌集』などの勅撰集に多数の歌がのっている。『和泉式部日記』『和泉式部集』がある。

道貞親王 橘道貞。？―一〇一六。平安時代中期の官吏。和泉守をへて長保六年（一〇〇四）陸奥守となる。藤原道長に近かった。和泉式部との間に小式部内侍をもうけた。

小式部 ？―一〇二五。平安時代中期の歌人。橘道貞の女。母は和泉式部。上東門院に仕え、のち藤原公成と結婚。歌合の歌人に選ばれたとき、藤原定頼に、丹後にいる母に知恵を借りたかとかかわれて、「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」の歌を返した逸話は有名。『後拾遺和歌集』などに歌がある。

重明親王 九〇六―九五四。平安時代中期、醍醐天皇の第四皇子。母は源昇の女。中務卿をへて、天曆四年式部卿となる。才学とも

にすぐれ、弟にあたる朱雀天皇、村上天皇の治世を補佐した。

小大君 生没年不詳。平安中期の女流歌人。三十六歌仙の一人。重明

親王の女ともいうが、出自もさだかではない。三条天皇の東宮時代（九八六～一〇一一）に女藏人として仕える。平兼盛、藤原高光、藤原公任などの著名歌人と交友した。三十六人集の一つ『小大君集』があり、『拾遺和歌集』以下の勅撰集に二十首ばかり入集し、『前十五番歌合』や『三十六人撰』に撰収され、『後拾遺和歌集』の巻頭歌人に拔擢されるなど、評価は高かった。

輔親 大中臣輔親。九五四～一〇三八。平安時代中期の公卿、歌人。

大中臣能宣の子。伊勢大輔の父。正三位。中古三十六歌仙のひとりで、『拾遺和歌集』以下の勅撰集に三十一首入る。家集に『祭主輔親卿集』。

伊勢太輔 生没年未詳。平安中期の女流歌人。中古三十六歌仙の一人。

大中臣輔親の女。上東門院彰子に仕えた。のち高階成順の妻。『後拾遺和歌集』などの勅撰集に五十余首のる。家集『伊勢大輔集』。

出羽守秀信 平季信の誤写。生没年未詳。父は直材。永祚元年（九八九）円融院判官代。長保三年（一〇〇一）出羽守になる。

出羽辨 生没年不詳。平安時代中期の女流歌人。出羽守平季信の女。寛弘年間（一〇〇四～一〇一二）一条天皇の中宮彰子に仕え、のち彰子の妹で、後一条天皇中宮威子やその子の馨子・章子内

親王に仕えた。藤原兼房、源経信らと歌を通じて親交があった。家集に『出羽弁集』。

越前守懷尹 藤原懷尹。生没年未詳。父は令尹。寛弘八年（一〇一二）式部丞、万寿三年（一〇二六）筑後守に任じられたが、赴任せず譴責される。

小辨 生没年不詳。平安時代中期の歌人。後朱雀天皇の皇女祐子内親王につかえ、内親王家の歌合にたびたび出詠。天喜三年（一〇五五）の「六条斎院物語歌合」に『岩垣沼物語』をつくり、賞賛された。歌は『後拾遺和歌集』以下の勅撰に収められている。一宮小弁、宮小弁とも。

左馬頭時明 源時明。生没年不詳。平安時代中期の官吏、歌人。馬内侍の父。左馬権頭、讃岐守などのち、長徳二年（九九六）播磨守に任じられたが、辞退し出家したといわれる。天徳四年の内裏歌合に参加した。家集に『時明集』。

馬内侍 生没年未詳。平安時代中期の歌人。右馬権頭源時明の女という。一条院の後の女官。中古三十六歌仙のひとり。家集に『馬内侍集』があり、藤原朝光、藤原道隆ら上流貴族との贈答歌が多くみられる。

高階成忠 九二三～九九八。平安時代中期の公卿、学者。高二位と称す。法名道観。東宮学士、一条天皇の侍読をつとめ、従三位にすすむ。孫の定子が中宮になったことにより正暦二年（九九二）従二位にのぼる。

高内侍 高階貴子。？九九六。平安時代中期の歌人。高階成忠の女。

円融天皇につかえて、高内侍と称され、従三位にのぼる。関白

藤原道隆と結婚。『大鏡』道隆伝にその漢詩の才を語る。和歌

は『拾遺和歌集』以下に六首入集。

大江匡衡 九五二～一〇一二。平安時代中期の儒者。維時の孫、重光

の子。歌人赤染衛門の夫。永祚元年（九八九）文章博士、長徳

三年（九九七）東宮学士となる。一条天皇の侍読、侍従をつと

め式部大輔にすすむ。『後拾遺和歌集』以下の勅撰集に十二首

入る。漢詩集に『江吏部集』、家集に『匡衡集』。

江侍従 生没年未詳。平安中期の歌人。大江匡衡の女。母は赤染衛門。

藤原道長に仕えた女房。和歌は『後拾遺和歌集』以下の勅撰集

に所収。

参議廣業 藤原広業。九七六～一〇二八。平安時代中期の公卿、漢詩

人。藤原有国の子。母は藤原義友の女。文章博士、式部大輔を

へて、寛仁四年（一〇二〇）参議。従三位にいたる。一条・三

条・後朱雀天皇の侍読。『本朝文粹』『本朝統文粹』『扶桑略記』

などに文が、『本朝麗藻』『類聚句題抄』などに詩句が残されて

いる。

新宰相 生没年未詳。上東門院彰子の女房。『後拾遺和歌集』に一首

のこる。

信濃守隆信 源隆俊の誤り。一〇二五～一〇七五。平安時代中期の

公卿。源隆国の長男。蔵人頭をへて、康平二年（一〇五九）参

議。権中納言、正二位にいたる。

兵衛内侍 生没年未詳。三条院女房。信濃守源隆俊の女。『後拾遺和

歌集』、『新千載和歌集』各一首入集。

道雅 藤原道雅。九九二～一〇五四。平安時代中期の歌人。中古

三十六歌仙の一人。儀同三司伊周の男。母は源重光の女。左近

衛中将となり、長和五年（一〇一六）従三位。歌は『後拾遺和

歌集』などに入る。

中将 生没年未詳。藤原道雅の女。上東門院彰子の女房。三十六歌仙

の一人。『後拾遺和歌集』に五首入る。

宮掖 帝王の居所。宮中。禁中。掖は掖庭、宮中の正殿の脇にあつて、

皇妃、宮女が住んでいる御殿。

詠言の選 和歌や詩文に優れた選りすぐりの者の意。

不徳 身に徳のないこと。帝の謙称。

〔典拠〕

『十訓抄』第一―二十一話。

（趙 倩倩）

〔寵禮8〕

小野右府①。至「寛仁時」。年八十餘。爲「其子」求「攝州」。與「時相」

賤曰。天曆舊臣某。既事「七朝」。願奏請賜「優」②。時相奏與「攝州」。

〔書き下し文〕

小野右府①、寛仁の時に至りて、年八十餘なり。其の子の爲に攝州を

求む。時相に與ふる賤に曰く、「天曆の舊臣某、既に七朝に事ふ。願はくは奏請して優を賜はらんことを」と。時相奏して攝州を與ふ。

〔訳文〕

小野右府（藤原実資）は、寛仁の時代には齡八十余りになっていた。その子資頼のために摂津国の知行を願ひ出た。時の関白に宛てた書状に言うことには、「天曆の旧臣某は、既に七代の天皇に仕えてきました。どうか奏上して優遇を頂戴したい」と。時の関白は帝に奏上して、資頼に摂津の国の国司の地位をお与えになった。

〔原注〕

① 實資。

② 右府少仕「天曆」。歴「安和天祿寛和永延長和」。至「寛仁朝」。

〔書き下し文〕

① 實資なり。

② 右府少くして天曆に仕ふ。安和、天祿、寛和、永延、長和を歴て、寛仁朝に至る。

〔訳文〕

① 実資である。

② 右府（実資）は若くして天曆朝に仕えた。その後、安和、天祿、寛和、永延、長和を経て、寛仁朝までお仕えした。

〔語釈〕

小野右府 藤原実資。九五七―一〇四六。小野宮右府・右大臣実資・

相府・右府・小野宮右大臣・実資大臣・小野宮のおとど。小

【大東世語】「寵禮」篇注釈稿（堀・馮・高橋・呂・趙・任・石本）

野宮流藤原氏、斉敏の三男、母は藤原尹文女、祖父実頼の養子となる。故実に優れ『小右記』『小野宮年中行事』などを残す。右大臣一位に昇る。

寛仁

平安中期、後一条天皇の代の年号。長和六年（一〇一七）四月二十三日代始により改元。寛仁五年（一〇二二）二月二日治安と改元。摂政関白藤原頼道の時代。年号の出典は『会稽記』の「寛仁三云々」。

其子

藤原資頼を指す。母は藤原常種の女。実資の養子。『尊卑分脈』には正四位下で摂津守ともあるが、『国司補任』では資頼が摂津守に任ぜられた資料を確認できない。治安元年（一〇二二）正月伯耆守に、長元元年（一〇二八）頃美作守に任ぜられている。道長の家司もつとめる。

攝州

摂津国の別名。

時相

関白左大臣頼通を指す。藤原頼通。九九二―一〇七四。宇治殿・宇治入道前太政大臣・宇治・宇治関白・執柄・摂政。道長の一男。母は源倫子。幼名田鶴。一条朝、寛仁元年（一〇一七）道長からの譲りで摂政、のち後一条・後朱雀・後冷泉の三代で摂関・任摂関として、前代未聞の若さと長さを誇る。但し娘に皇子は生まれず、父以来の摂関家の繁栄の陰りとなった。宇治平等院を建立、晩年は出家（蓮花覚、のち寂覚）して宇治に隠遁、文事を好んだ。勅撰歌人。

天曆

平安時代、村上天皇の代の年号。天慶十年（九四七）四月

二十二日、前年の天皇即位により改元、天曆十一年（九五七）十月二十七日に天徳元年となる。太政大臣は藤原忠平。

天曆舊臣 実資は安和二年（九六九）二月、十三歳で元服して始めて従五位に叙せられた。ただし、それより前の、康保三年（九六六）十月七日殿上侍臣の奏樂に小舎人として納蘇利を舞い、村上の感興を蒙り（『西宮記』「宴遊」「臨時樂」所引の『村上御記』）、後年そのことを深くなつかしみ回想している（『小右記』逸文「野府記」長保三年十月七日の条）。この回想から天曆の旧臣と言っているのであろう。『古事談』巻第一―三十九話には、実資が養子資頼を摂津国守への給官を強く願い出たと語るが、これは寛仁五年（一〇二二）正月伯耆守任官（『小右記』）の例を誤り伝えたものかとも思われる。しかし、『尊卑文脈』にも資頼の官歴に「摂津守」と記す（但し伯耆守を記していない）から、『古事談』の話はまた別のものかも知れない（橋本義彦『平安貴族社会の研究』一九七六年九月、一八二頁）。

安和 平安時代、冷泉・円融両天皇の代の年号。康保五年（九六八）八月十三日、東大寺、興福寺の乱闘などの事件のため改元。安和三年（九七〇）三月二十五日に至り天祿元年となる。

天祿 平安時代、円融天皇の代の年号。安和三年（九七〇）三月二十五日に前年の天皇即位により改元、天祿四年（九七三）十二月二十日に天延元年となる。

寛和 平安中期、花山・一条両天皇の代の年号。永観三年（九八五）四月二十七日代始により改元。寛和二年六月以降は一条天皇。寛和三年四月五日永延と改元。

永延 平安時代、一条天皇の代の年号。寛和三年（九八七）代始により改元。摂政藤原兼家の時代。永延三年（九八九）八月、永祚と改元された。

長和 平安時代、三条・後一条両天皇の代の年号。寛弘九年（一一〇二）十二月二十五日に前年の天皇即位により改元、長和六年（一一〇七）四月二十三日に寛仁元年となる。藤原道長の全盛時代。

牋 文書、手紙。

奏請 奏上してお許しを請う。

優 優遇する。

〔典拠〕

『古事談』巻第一―三十九話。

（高橋 憲子）

〔寵禮9〕

源亞相隆國。①永承時。寵遇用事。延久帝②在「東宮」。於「事側目」即位始。有「欲泄」怒其子「之意」。其伯子隆俊。爲「黃門」在「省中」。帝密自「青鑲」窺見。姿儀尤美。就「列儼然」。正「笏而坐」。未「嘗顧眄」。日後稍試「其狀」。恪勤奉「公」。加有「才幹」。謂卿相之器也。後又察「

其仲隆綱。時爲「參議中郎」。值「朝議有「射」狐事」。隆綱執「筆書」判云。雖「有「飲羽之號」。未「見「首丘之實」。帝視「其文才」。擢「之左右」。又察「其季」。會宮中俄火。帝急駕「腰輿」。將「出避」。諸雜人乘「災」。闌「入殿陞」。中外喧擾。帝輿不「得」前。季子俊明。時爲「羽林將」。速入。乃自把「弓」。毆逐令「退」。侍「衛帝輿」。事寧後。帝大賞曰。微「俊明」。朕幾被「辱」。於「是宿怒悉霽」。皆用爲「近臣」。眷遇無「比」。

〔書き下し文〕

源亞相隆國、永承の時、寵遇せられ事に用ゐらる。延久帝、東宮に在るとき、事に於いて側目す。即位の始め、怒りを其の子に泄らさんと欲するの意有り。其の伯の子の隆俊、黃門と爲りて省中に在り。帝密かに青鑲自り窺ひ見るに、姿儀尤も美なり。列に就きて儼然たり。笏を正して坐し、未だ嘗て顧眄せず。日後稍其の狀を試す。恪勤にして公に奉じ、加ふるに才幹有り。謂へらく卿相の器なりと。後又た其の仲の隆綱を察す。時に參議中郎たり。朝議狐を射る事有るに値ふ。隆綱筆を執りて判を書して云く、「飲羽の號有りと雖も、未だ首丘の實を見ず」と。帝其の文才を視て、之を左右に擢んづ。又た其の季を察す。會たま宮中俄かに火あり。帝急に腰輿に駕し、將に出でて避けんとす。諸の雜人災いに乘じて殿陞に闌入す。中外喧擾たり。帝輿前むを得ず。季子の俊明、時に羽林將爲り、速やかに入り、乃ち自ら弓を把り、毆逐して退かしめ、帝輿に侍衛す。事寧んじて後、帝大いに賞して曰く、「俊明微せば、朕幾ど辱められん」と。是に於いて宿怒は悉く霽れ、皆用ゐて近臣と爲す。眷遇比

ぶる無し。

〔訳文〕

権大納言源隆国は、永承年間に後冷泉天皇の寵愛を受けて仕えていた。後三条天皇は東宮であつた時に、ある事で隆国を憎んでいた。天皇は即位した当時、その怒りを隆国の息子たちにつつけようとした。隆国の長男の隆俊は権中納言として殿中にいた。天皇は密かに堀の隙間から彼の姿を窺い見ると、隆俊の容貌と振る舞いはもつとも美しく、威儀正しく列にあり、笏を正して坐し、まったく目を動かさなかつた。後日、隆俊の人柄を少し試した。彼はつつしみ深く公務につとめ、加えて優れた才能を持つており、公卿になる良い人材で、器量の持ち主と言える。のちにまた隆国の次男の隆綱を觀察した。隆綱は參議中郎であり、朝議の場に（前大和守藤原成資の三男仲季が伊勢斎宮の辺で）白靈狐を射殺した事件に関する話題が出された。隆綱は筆を執つて評決文にこう書いた。「飲羽の号有りと雖も、未だ首丘の実を見ず（矢はしっかり命中したが、狐の死は明らかならず）」と。天皇はその文章を見てその実力を認め、隆綱を側近に抜擢した。また隆国の三男の俊明を觀察した。ちょうど宮中で火災が起きたため、天皇は急いで腰輿に乗り、外に避難しようとしたときに、雑役の者が火災に乗じて宮殿の階段まで入り込んだ。そのため、宮中の内も外も騒がしくて、天皇の輿は前に進むことができなかった。そのとき、隆国の末子の俊明は、近衛の將軍に任じており、速やかに殿内に入ると、自ら弓を手にして、雑役の者たちを追いやり、その場から立ち退かせる

と、天皇の輿を護衛した。火災が落ち着いたあと、天皇は俊明を大いに褒め称えて、「俊明がいなければ、朕はきつと辱めを受けたらう。」と言った。かくして、積年の恨みが晴れ、彼らを全て近臣として登用した。その恩遇はほかの者たちと比べ物にならなかった。

〔原注〕

① 宇治。

② 後三條。

〔書き下し文〕

① 宇治なり。

② 後三條なり。

〔訳文〕

① 宇治大納言である。

② 後三条天皇である。

〔語釈〕

亞相 大納言の異称。

隆國 源隆國。一〇〇四―一〇七七。平安時代中期の公卿。宇治大納言と称されている。権大納言源俊賢の第二子。初め宗国、のち隆国と改める。長元七年に参議、寛徳三年正二位に進み、治歴三年権大納言に進んだ。関白頼通の殊遇を受け、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條、白河の五朝に歴仕し、その一家はみな栄達した。晩年に宇治の別荘に住み、往来の人から諸国の奇談を聞いて『宇治大納言物語』を著したという。

宇治

京都府南部の地名。古来、大和・近江間の交通の要地で、特に初瀬詣での中継点として風光明媚を誇り、網代、霧などの特徴的な景物が和歌によく詠まれた。平安時代から貴族の別荘地として知られ、平安中期以降の末法思想の普及によって藤原頼通が別荘を平等院に建て替えたことは有名。

永承

平安時代、後冷泉天皇の時代の年号。寛徳三年四月十四日代始により改元。関白藤原頼通の時代。永承八年正月、天喜と改元された。

寵遇

寵愛して特別に待遇する。寵待。

後三條

後三条天皇。一〇三四―一〇七三。延久帝。第七十一代の天皇。一〇六八―七二年在位。後朱雀天皇第二の皇子、母は禎子内親王。後冷泉天皇の死により三十五歳で即位。藤原教通を関白としたが、莊園整理令をだし、公定枿を制定するなど、すすんで親政を行った。諱は尊仁。法名は金剛行。

隆俊

源隆俊。一〇二五―一〇七五。平安時代の公卿。源隆国の長子。藏人頭を経て、康平二年参議。権中納言、正二位に至る。後三条天皇の近臣として仕えた。

隆綱

源隆綱。一〇四三―一〇七四。平安時代の公卿。源隆国の次男。藏人頭を経て、治暦四年参議。正三位に至る。後三条天皇に文才を認められ、兄隆俊とともに近臣として仕えた。

俊明

源俊明。一〇四四―一一一四。平安時代の公卿。源隆国の三男。承保二年参議。のち正二位、大納言兼民部卿。白河院の別当を

つとめた。摂関家の藤原忠実にもおもんじられ、鳥羽天皇即位のとき、天皇の外戚藤原公実がのぞんだ摂政就任を阻止したという。

側目 目をそらして直視しないこと。憎んで横目で見ること。

黄門 黄門侍郎の略。中納言の唐名。

省 御殿。宮中。禁中。

青鏤 塀や車の腰箱、椅子、経机などの格狭間の内の盲連子に緑青を塗ったもの。

儼然 いかめしくおごそかなさま。動かしがたい威厳のあるさま。

顧盼 振り返ってみる。また、見回す。

恪勤 つつしみつとめる。

射狐事 狐を射る事。前大和守藤原成資の三男仲季が伊勢斎宮の辺で白靈狐を射殺して十二月七日土佐国に配流された事件。大神宮から訴訟があったため、近衛の陣の座での公卿以下による評議が行われた。隆綱は評議の際の決定書を書いた。この話は、『十訓抄』、『扶桑略記』に見える。

飲羽之號 『呂覽』「精通」篇に、「養由基射_レ兕中_レ石、矢乃飲_レ羽。高誘注、飲羽、飲_レ矢至_レ羽」とある。「飲羽」は、強弓を引き、矢が深く入って矢の羽を没するに至ること。「號」は、評判、聞こえ。

首丘之實 『礼記』「檀弓上」篇に、「古之人有_レ言、曰、狐死、正丘_レ首、仁也」とある。狐が死ぬ時にその首をもと住んでいた丘の方に

向けて死ぬこと。その本を忘れない喩。狐の三徳の一つ。「實」は、事実。ここは狐が死んだという事実をいう。

擢 拔擢する。

腰輿 輦を腰のあたりで支えてはこぶ輿。手輿。

殿陞 御殿前の階段。

羽林 天子の宿衛をつかさどる役。近衛府の中将、少将の唐名。

眷遇 特別に目をかける。目をかけてもてなす。手厚くもてなす。

〔典故〕

『古事談』卷一―第六十四話。

(馮 超鴻)

〔寵禮10〕

藤實政①。初爲_二東宮學士_一。延久帝即位。爲_二甲州_一上京。以_二已補_レ外。未_三敢見_二「恃舊之意」_一。帝乃慰勞。及_レ還_レ任。賜_レ詩餞送云。州民縱發_二「甘棠詠」_一。莫_レ忘_二「多年風月遊」_一。

〔書き下し文〕

藤實政、初め東宮學士_た爲り。延久帝 位に即くに、甲州_た爲りて京に上る。已に外に補するを以て、未だ敢へて舊を恃むの意を見_{あらは}さず。帝乃ち慰勞して、任に還るに及びて、詩を賜りて餞送して云く、「州民縱ひ甘棠の詠を發すとも、多年 風月の遊を忘ること莫れ」と。

〔訳文〕

藤原実政は初め延久帝（後三条天皇）の東宮學士であった。延久帝が

即位した時、彼は甲州国守として上京した。すでに地方官に任ぜられていたので、敢えて（延久帝との）昔の関係を待みにする意思を見せなかった。すると、帝は彼を慰勞して、彼が任地に帰る時、詩を賜り、見送った。詩には「たとえ州民があなたの徳をたたえて甘棠の詠をうたったとしても、長年私とあなたが風流な交遊をしたことを忘れないでほしい」とあった。

〔原注〕

①式部太輔資業之子。侍讀學士。參議右大辨。大宰大貳。

〔書き下し文〕

①式部太輔資業の子なり。侍讀學士、參議右大辨、大宰大貳なり。

〔訳文〕

①式部太輔資業の子であり、侍讀學士、參議右大弁、大宰大貳である。

〔語釈〕

藤實政 藤原実政。一〇一九～一〇九三。平安時代中期の公卿、漢詩人。父は式部太輔資業で、母は加賀守源重文の女。十七歳で穀倉院學問料を支給され、文章道を歩んで、後三条・白河天皇二代の侍讀を務めた。延久四年（一〇七二）には拔擢されて左中弁に任じ、承暦四年（一〇八〇）參議になった。応徳元年（一〇八四）大宰大貳に転じたが、寛治元年（一〇八七）宇佐八幡宮と争い、翌年十一月伊豆に流され、そのまま配所で死去。作品は少ないが、後三条天皇との交情をめぐる説話は『今鏡』

などでは有名である。

資業

藤原資業。九八八～一〇七〇。平安時代中期の公卿。日野三位とも称された。父は藤原有国、母は三位徳子（橘仲遠の女で、一条天皇の乳母）。右少弁、東宮學士などを経て、長和二年（一〇一三）從五位上に叙せられ、さらに藏人、左衛門權佐、文章博士、丹波守などを歴任した。治安元年（一〇二二）勘解由長官、同三年式部太輔を兼任し、また播磨守や伊予守なども務めた。寛徳二年（一〇四五）非參議で從三位に叙せられ、永承元年（一〇四六）式部太輔に再任された。同六年に出家して法名を素舜と号し、日野（京都市伏見区）の山莊に隱居して法界寺薬師堂を建立した。

延久帝 後三条天皇のことである。延久は平安時代、後三条、白河両天皇の代の年号。後三条天皇即位により、治暦五年（一〇六九）四月十三日改元。

甲州 甲斐国の別称。現在の山梨県である。

餞送 旅立つ人を見送る。送別。

甘棠之詠 人々が為政者の徳をたたえること。中国、周の宰相召公が甘棠樹の下で民の訴訟を聞き、公平に裁断したので、民が召公の徳を慕い甘棠の詩をつくりうたったという故事による。その詩には「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇。蔽芾甘棠、勿剪勿敗、召伯所憩。蔽芾甘棠、勿剪勿坏、召伯所說」とある（『詩經』国風「召南」）。

風月 風流を楽しむこと。詩歌、文墨の韻事。

〔典故〕

『今鏡』卷一「すべらぎの上（司召し）」。

『古事談』第一―第五十七話。

『十訓抄』第五―三話。

〔備考〕

後三条天皇が送別の詩を賜った時期については、違いが見える。『今鏡』では後三条天皇の在位中の作にしているが、『古事談』『十訓抄』では後三条天皇が東宮であった時の作にしている。

（呂 天雲）

〔寵禮11〕

大監物周光。以「詩學生」與宴。年已八十。不能升階。大藏卿長成。春宮大進朝方。時爲「弟子」。起乃前後相扶而升。時以爲「寵」。

〔書き下し文〕

大監物周光、詩學生を以て宴に與かる。年已に八十にして、階に升ること能はず。大藏卿長成、春宮大進朝方、時に弟子爲り。起ちて乃ち前後して相ひ扶けて升る。時に以て寵と爲す。

〔訳文〕

大監物藤原周光は詩學生として詩宴に招かれた。年がすでに八十歳であったので、階段を上ることができなかった。大藏卿藤原長成と春宮大進藤原朝方は、周光の弟子であったので、立ちあがると、前と後と

で周光を助けて登らせた。（周光にとって）たいへん名誉なことだと当時の人々は言った。

〔語釈〕

大監物周光 藤原周光。生没年未詳。平安時代後期の官吏、漢詩人。民部丞藤原頼長の子で、文章博士藤原敦基の養子。天治元年（一二二四）四十六歳前後で文章生、康治元年（一一四二）從五位下に進み、檢非違使、後年大監物に至る。学者としても官吏としても思うように昇進できず、六十代後半に一時隱遁生活を送るが、再び出仕し、保元三年（一一五八）内宴に招かれ、老齡のため弟子の高官に支えられ階を昇り面目を施した。藤原忠通の恩顧を受け、釈蓮禪とも親交がある。『本朝無題詩』に最多の百五首が採られ、暗い胸中を吐露した作が多い。大監物は、令制で中務省の職員。監物のうちで上位のもの。大藏省、内藏寮などの倉の鍵を管理する責任者。從五位下相当。

詩學生「學生」は、令制で中央の大学、地方の国学に学ぶ貴族、有力者の子弟。平安時代、藤原氏の勸学院など諸氏の大学別費で学ぶ者。「詩學生」というのは、漢詩に優れた「學生」のことか。典故と考えられる『古今著聞集』に「侍學生」となっている。

大藏卿長成 藤原長成。生没年未詳。平安時代末期の公家。白河院・鳥羽院の近臣であった藤原忠能の次男。母は参議・藤原長忠の女。源義経の養父。極官は大藏卿で、邸宅が一条大路沿いにあったことから一条大藏卿と号した。大藏卿は、律令制で、大

藏省の長官。正四位下相当。

春宮大進朝方 藤原朝方。一一三五～一二〇一。藤原朝隆の子。母は葉室顯隆の女。安元元年（一一七五）参議、のち権大納言、正二位。堤大納言とよばれた。能書としても知られた。春宮大進は、東宮に関する事務をつかさどる官職、従六位上相当。

〔典拠〕

『古今著聞集』卷第三「公事」第四「保元三年の正月、長元以来中絶の内宴再興の事」。

（趙 倩倩）

〔寵禮12〕

源相俊房。①才學文章。稱於當世。其弟顯房。不必長學。亦以唱詠。且后父故。俱承上②遇。竝爲亞相。屬上相闕。次當拜俊房。上意欲授顯房。咨江匡房。江乃言具瞻所歸。故須才學。宜授俊房。且兄先順也。上曰。若依順叙。有以久次希進者。固亦不尠。且顯房若失此時。恐將遜世者。是應憂耳。奈何。江曰。唯憂陛下不從公論耳。未有兄以才學拜相。其弟乃慍遜世者。於是用俊房。顯房後亦拜相。

〔書き下し文〕

源相俊房、才學文章、當世に稱あり。其の弟顯房、必ずしも學に長ぜざれども、亦た唱詠、且つ後の父の故を以て、俱に上の遇を承け、竝に亞相爲り。上相闕くるに屬ふ、次當に俊房を拜すべし。上の意顯

房に授けんと欲す。江匡房に咨るに、江乃ち言ふ、「具瞻の歸する所、故より才學を須つ。宜しく俊房に授くべし。且つ兄先づは順なり」と。上曰く、「若し順叙に依らば、久次を以て進むことを希ふこと有る者は、固より亦た尠なからず。且つ顯房 若し此の時を失はば、恐らくは將に世を遜せんとす。是れ應に憂ふべきのみ。奈何」と。江曰く、「唯だ陛下の公論に従はざることを憂ふるのみ。未だ兄 才學を以て相に拜せんに、其の弟は乃ち慍みて世を遜る者は有らず」と。是に於いて俊房を用ふ。顯房後に亦た相に拜す。

〔訳文〕

宰相である源俊房は才学と文章が当時の世の中において賞賛されていた。彼の弟の顯房は必ずしも学問では兄に及びも付かなくても、歌詠みの才能と後の父であるという理由で、俊房と共に帝の厚遇を受けており、（兄と）同じく大納言となった。その時、おりしも大臣に欠員が生じ、順番では俊房に任命すべきであったが、帝は顯房に授けようと考え、大江匡房に相談した。匡房はこう言った、「大臣は衆目の集まる職位です。才学が必要です。俊房に大臣を授けるべきです。また、兄が先に昇進するのが順序です」と。帝が言うことには、「もし順序によれば、長く同じ官職にとどまっていた昇進することを願っている人が、もともと少なくない。その上、顯房はもしこの機会を失ったら、恐らく世の中から身を隠すかもしれない。これは憂慮すべきことだ。どうだろうか」と。大江匡房はこう言った、「ただ陛下が公論に従わないことを私は憂慮しています。兄が才学によって左大臣に任

命されたからといって、その弟はそれを恨んで遁世することはないでしょう」と。そこで俊房を登用した。のちにまた顕房も大臣に任命された。

〔原注〕

① 後中書王之孫、左大臣師房の子。官左府。稱「堀川」。其弟顕房。

官右府。稱「六條」。

② 白河帝。

〔書き下し文〕

① 後中書王の孫、左大臣師房の子なり。官は左府、堀川と稱す。其の弟は顕房、官は右府、六條と稱す。

② 白河帝なり。

〔訳文〕

① 後中書王の孫、左大臣師房の子である。官位は左府、堀川と称した。その弟は顕房、官位は右府、六條と称した。

② 白河天皇である。

〔語釈〕

俊房 源俊房。一〇三五～一二二。平安時代後期の公卿。源師房の長男。天喜五年（一〇五七）参議。永保三年（一〇八三）左大臣となり四十年在任。従一位。文筆に長じ、政理に通じた。皇位継承にからんで立場をわるくし、実権は弟の源顕房にうつった。堀川左大臣と号す。

顕房 源顕房。一〇三七～一〇九四。平安時代中期から後期までの

公卿。源師房の次男。康平四年（一〇六一）参議。白河天皇の中宮藤原賢子の実父として昇進し、永保三年（一〇八三）兄の左大臣俊房と並んで右大臣に昇った。従一位。堀河天皇の即位で外祖父となり、兄俊房をこえて村上源氏の主流の地位をしめた。六条右大臣と号す。

後中書王 具平親王の別称。九六四～一〇〇九。平安時代中期の詩人、歌人。中務卿。六条宮・千種殿・後中書王とよばれる。村上天皇の第七皇子。文才豊かで、和歌・漢詩文に長じ、音楽・陰陽・医術などにも通じた。

師房 源師房。一〇〇八？～一〇七七。平安中期の公卿。村上天皇の皇子具平親王の子。源の姓を賜り、臣籍に降下。村上源氏の祖。土御門右大臣と称された。のち太政大臣となったが、即日死去。才学すぐれ、歌は『後拾遺和歌集』以下に十首はいる。

堀川 源俊房の号。

六条 源顕房の号。「六条右大臣」の略。

白河帝 白河天皇。一〇五三～一二二九。平安後期の天皇。第七十二代天皇。名は貞仁。天喜元年（一〇五三）生まれ。後三条天皇の第一皇子。在位期間は一〇七二～八六年。譲位後も、堀河、鳥羽、崇徳天皇の三代にわたって四十三年間院政を行った。深く仏教に帰依し、社寺参詣もしきりに行った。

亞相 大納言の唐風の呼び名。

上相 宰相を尊敬していうことば。

江匡房 大江匡房。一〇四一―一一一。匡衡の曾孫。成衡の子。江大府卿、江都督などと称された。正二位権中納言に至る。彼は後三条天皇の側近となり、院の近臣として白河院政権に深くかかわった官僚であるとともに、後三条・白河・堀河三代の侍読に象徴される当代の学者の第一人者であった。

后父 皇后の父。ここでは、白河天皇の中宮藤原賢子の実父であることを指す。

具瞻 衆人が共に仰ぎ見る。また、その位にあるもの。

順序 自然現象や人間関係の正しい秩序。

久次 長い間昇進せず、同じ官にとどまること。「次」は、とどまる意。すくない。

逡 のがれる。ある場面から退く。また、その場から逃げ出す。

〔典拠〕

『今鏡』卷七「むらかみの源氏」。

（馮 超鴻）

〔寵禮13〕

六條右府①侍「上皇」。皇問曰。世今有「何事」。右府曰。臣向問「丞相②夫人疾」。牀枕前後。有「三大臣」侍「藥」。可「謂」奇事」。皇曰。盛哉。此間難「得」復爾」③。

〔書き下し文〕

六條右府 上皇に侍す。皇問ひて曰く、「世に今何事か有る」と。右

府曰く、「臣向に丞相の夫人の疾を問ふ。牀枕の前後に、三大臣有りて藥を侍す。奇事と謂ふべし」と。皇曰く、「盛んなるかな。此の間復た爾ること得難し」と。

〔訳文〕

六条右府源顕房が白河上皇のもとに参上した。上皇は「今、世の中にはどんなことが起っているのか」とお尋ねになられた。右府がおっしゃるには、「私はさきほど京極殿の夫人のご病氣の見舞いに参りました。病床の枕元の辺りに三大臣がおられ、薬事に付き添っておられました。まったく驚くべき事です」と。上皇は「素晴らしいことであるよ。近ごろではなかなかありえないことだ」と仰せになられた。

〔原注〕

① 顯房。

② 京極師實。

③ 夫人昆弟堀川左府。其一人則六條右府。其子師通内府也。

〔書き下し文〕

① 顯房なり。

② 京極師實なり。

③ 夫人の昆弟は堀川左府なり、其の一人は則ち六條右府なり。其の子師通は内府なり。

〔訳文〕

① 源顕房である。

② 京極師実である。

③夫人の兄弟は堀川左大臣源俊房であり、もう一人は則ち六条右大臣源顕房である。其の子師通は内大臣である。

〔語釈〕

六條右府 六条右大臣源顕房。

顯房〔寵禮12〕〔語釈〕〔顯房〕参照。

上皇〔寵禮12〕〔語釈〕〔白河帝〕参照。

丞相 官名。天子を補佐して政治を行う最高の臣。大臣。

京極師實 藤原師実。一〇四七―一一〇一。平安末期の廷臣。頼通の子。通称、京極殿。養女賢子の生んだ堀河天皇が即位すると摂政、次いで太政大臣・関白となった。和歌・琴に秀で、日記『京極関白記』がある。

牀 寝台、床。

奇事 めったにない事。

昆弟 兄弟。

堀川左府 堀川左大臣源俊房。

師通 藤原師通。一〇六二―一〇九九。平安末期の公卿。関白。通称、後二条関白。父は師実。母は源師房の娘麗子。嘉保元年

(二〇九四) 関白となる。資性剛直で、白河法皇の院政を非難し、僧兵の横暴を抑え有能の士を挙用して統治を引き締めた。和歌・漢詩をよくし、大江匡房に学んだ。日記『後二条師通記』がある。

内府 内大臣。

〔典拠〕

『古今著聞集』卷十八第三〇四話「京極大殿師實の北政所の不例に三大臣伺候の事」。

(高橋 憲子)

〔寵禮14〕

源武庫頼政。少時微_レ見_二天仁宮姫菖蒲_一。眷懷_レ經_レ年。後上聞_レ之。欲_二出賜_レ之。便試飾_二同色宮侍三人_一。雜_二菖蒲其中_一。出在_二階上_一。而召_二頼政_一。令_二自擇_一焉。頼政恐_二其誤認_一。未_二敢即進_一。作_レ歌陳_二其迷惑意_一。上大悦賞。乃起自引_二菖蒲_一賜_二頼政_一。頼政拜感。婉媛殊至。時人語曰。得_レ婦諧樂。媒妁不_レ惡。

〔書き下し文〕

源武庫頼政、少き時 天仁の宮姫菖蒲を微見し、眷懷 年を経たり。後に上 之を聞き、出して之に賜はらんと欲す。便ち試みに同色の宮侍三人を飾り、菖蒲を其の中に雜_レへ、出して階上に在らしむ。而して頼政を召して、自ら擇ばしむ。頼政其の誤認せんことを恐れ、未だ敢へて即ち進まず。歌を作りて其の迷惑の意を陳_レぶ。上大いに悦賞し、乃ち起ちて自ら菖蒲を引きて頼政に賜ふ。頼政拜感す。婉媛殊に至る。時に人語りて曰く、「婦を得て諧樂し、媒妁悪からず」と。

〔訳文〕

兵庫頭源頼政は若い時、鳥羽天皇の女官である菖蒲をひそかに見た後、何年も心にとめて想っていた。後に、帝はそのことを聞いて、菖

蒲を出して、頼政に賜ろうとした。そこで試みに、似た姿形の女官三人を飾りたて、菖蒲をその中に交えて、階段の上に出させた。こうして、頼政を召しだして、彼に自分で選ばせた。頼政は菖蒲を見間違えることを恐れて、あえてすぐには前に進みでなかった。歌を作ってその戸惑う気持ちを述べた。帝は大いに喜んで、称賛した。席からお立ちになると、自ら菖蒲を引いて頼政に賜った。頼政は拝礼して、ありがたく思っていた。菖蒲はそのしとやかさがとりわけ際立っている。当時人々は「婦を得てなごみ楽しむのは、仲人が悪くなかったからでしょうね」と語った。

〔語釈〕

源武庫頼政 源頼政。一一〇四～一一八〇。平安時代末期の武将・歌人。父は摂津源氏源仲政、母は藤原南家友実の女。通称源三位入道。保元の乱（一一五六）、平治の乱（一一五九）で勝者の側に属し、平氏政権下で源氏の長老として中央政界に留まった。平清盛から信頼され、晩年には武士として破格の従三位に昇り、公卿に列した。のち、以仁王と平氏追討を企てたが、事前に発覚して、宇治平等院で自殺。歌人としては藤原俊成など多くの著名歌人と交流があり、その詠歌は『詞花集』以下の勅撰和歌集に計五十九首入集しており、家集に『源三位頼政集』が残る。武庫は武器を納める倉を指し、兵庫頭の唐名。源頼政は久寿二年（一一五五年）に兵庫頭に任じられた。

天仁 元号の一つ。一〇〇八～一〇〇九。この時代の天皇は鳥羽天皇。

宮姫 宮中に仕える女性。女官。

菖蒲 菖蒲御前。生没年不詳。源頼政の妻。もと鳥羽院につかえていた女官。治承四年（一一八〇）夫の平家打倒の挙兵に先だつて伊豆・長岡へ逃れる。頼政の死後、伊豆西浦の禪長寺に堂を建立し、出家して、名を西妙とあらためる。建保三年（一二二五）八十九歳で死去したという。

眷懷 かえりみて、思う。

同色 同じ色。ここでは、似た姿の意としてとる。

迷惑 心が迷いまどう。

婉媛 美しい女。

諧樂 おだやかな気持ちで楽しむこと。諧は和らぐ、おだやかになること。

媒妁 男女の縁を取りもつこと。また、その人。なこうど。

〔典拠〕

『源平盛衰記』卷第十六「菖蒲前の事」。

『太平記』卷第二十一「覚一真性連平家の事」。

（呂 天雯）